さを指摘する。外国語の理解度はその人の翻訳力にかかっている。なによりも、日本語の力をしっかり深く身につけなければ、英語の力がつく保証はないのだ。この点について、寺島氏は「外国語教育は母語を耕す力強い鍬」であり、「母語を耕し、自分を耕し、自国を耕すのが外国語だ」とのべている。

「完了形、進行形、受身形の作り方」「その否定文・疑問文の作り方」は英語の土台をなしている。ところが、こうした英語学習の基本中の基本をきちんと習得しないまま大学に入ってきている学生が増えている。著者は「中学・高校における会話中心の授業がこのような学生を大量につくり出している」と指摘する。

授業法は日本の教室の中に

こうしたなかで、著者が日本人に適応した「人間教育」をめざした大学での授業方法は、これまで流布されてきた外国の教授法の延長線上ではなく、日本の教室から生まれたものであることが強調されている。著者は日常の教室でのできごとを細やかに再現するなかで、また学生たちの感動と向上の喜びを紹介しつつ、「授業改革のヒントは外国の教室の中にあるのではなく、いま自分が教えている教室の中にうずもれている」と、感慨を込めて書いている。それは、語学は暗記すべきものという定説をとり除き、教材選びに細心の注意を払い、映像の使用、グループ学習などを運用して、学習に魅力を感じ自然と身を投じることができ、みんなで助けあい自分自身の力で課題を達成できるような場を形成する創意性と結びついたものである。

英語の題材については、ビクトル・ユーゴーの『レ・ミゼラブル』を教材にした授業など、優れた文学作品や米軍基地や原発、中東問題などを正面からとりあげている。そこではアメリカの報道の側からではなく、抑圧された人人の側から新しい発見を見出せるものを選ぶ必要性が浮き彫りにされている。「英語の教師は言葉の教師の一人とし為政者が使う（そしてメディアがそのまま繰り返して使う）言葉のトリックを見破る力も必要だ」という観点である。戦後、占領期のアメリカの機密報告で、日本人の英語学習を受け入れる性向を利用して、「健全なアメリカの理念」（アメリカ的な価値観）を日本社会に浸透させることを明記していたことにもふれている。

著者は中国語や韓国語、フランス語、ドイツ語の授業ではその言語で教えるように強要しないのに、なぜ英語の授業だけは英語で教えろというのかと問いかけている。それは決して、教育現場の発想でないことだけは確かである。著者はこの点について、「英語を国家の言語とする強者の国」が押しつけた教育方法であり、そこに「政治的経済的理由」があるとの見方を提示している。

この点とかかわって、日本がかつてアジアの植民地でおこなった「日本語で日本語の授業」と通じることも明らかにしている。当時、植民地の現地では「直接法」か「対訳法」かの論争もあり、実践面ではまったく統一されていなかったという。著者はこうした歴史的経験からも「実態に合わない教授法はいくら権力者がむり強いしても教育現場には浸透しない」と断言している。

（一）

（明石書店発行、四六判・二四三ページ、二五〇〇円＋税）